

# コロナ禍で変化しつづける観光

## -観光は人々に何をもたらすか 東京近郊に注目して

国際観光学部二年 名前 丹野佑亮 浜崎美帆 (栗原ゼミ)

### 1 背景

2020年から私たちは未曾有の事態に見舞われている。観光産業においては感染拡大に対する心配の声もあるが、その中でも観光業で働く人々とその地域で得られるはずだった利益は守らなくてはならない。加えて本来の目的である、人々が旅行で普段とは違う生活を得て癒しや発見などを手にするため、観光は必要不可欠な分野である。

そのなかでコロナ禍における新形態として、密を避けた、近場で行う観光が求められている。

**アウトドア、マイクロツーリズム、ワーケーション**の3つの例を挙げ、これら地域を居住者の多い**東京近郊**に絞って近年の観光がもたらす影響について考察した。

### 2 考察

#### アウトドア



オートキャンプ人口は2020年には前年より300万人ほど減少した610万人という結果にはなれども、近年ブーム化傾向にあるキャンプについて今回は考察していく。キャンプと一口に言えども、ソロキャンプや家族キャンプ、グランピングなど幅広い種類がある。特にキャンプにおいては経験年数が一年の人口も多く、これからまた発達していく分野であるとも考えられる。

##### [事例] 山梨県富士河口湖町

(右図より)コロナ禍でメインの観光地である河口湖エリアなどの観光客数は減少するも、精進湖・本栖湖エリアは観光客数が増加。以前から河口湖町では河口湖エリアの観光客が多く、オーバーツーリズムの観点から観光客の分散が指摘されていた。このエリアではコテージがキャンプ場としての利用が進められている。コロナ禍におけるキャンプ需要の増加によりオーバーツーリズムまで改善された例である。

単位:千人

	河口湖北	河口湖南	富士山	西湖	精進湖・本栖湖	エリア計
10月	39.5	72.4	40.7	16.1	6.3	174.9
11月	59.0	94.2	42.7	26.3	4.9	227.1
12月	23.1	73.2	21.1	4.8	2.3	124.5
1月	10.7	10.1	9.8	3.1	0.8	34.3
2月	7.8	9.3	9.7	1.7	0.5	28.9
3月	21.1	20.0	20.5	4.8	1.6	68.0
2020年度計	161.2	279.0	144.5	56.8	16.3	657.7
2019年度計	404.6	269.4	263.8	159.4	15.7	1,113.0
対前年比	39.8%	103.6%	54.8%	35.6%	104.2%	59.1%

#### ワーケーション

近年増加傾向にある新しい勤務・旅行形態。リスクの面からみても、旅館としては旅行者の滞在日数が増えるほど感染リスクが低下するため歓迎できる。平日の観光や、旅館に滞在して体験などを行ったりと人ごみを避けるなどオーバーツーリズムにも配慮できる。



##### [事例] 箱根町

箱根町では観光客から得られる収入に入湯税がある。税収は観光地の整備だけでなく、地域の消防施設やごみ処理・下水道整備などの生活に密着した部分にまで充当される。そのため観光客の減少は町の基盤にかかわる事態であると考えられる。また、箱根町は温泉地であり、仕事の疲れを癒すことができると多くの旅館が候補地に名乗りを上げている。



#### マイクロツーリズム

コロナ禍において、遠くに旅行することがあまり推奨されないなかで近隣への宿泊や日帰り旅行をするマイクロツーリズムが人々に受け入れられた。リピート性を持たせることによって安定したマーケットとなり得る。特に関東近郊の首都圏ではマイクロツーリズムが広く浸透した。

星野リゾートは地元の魅力を再発見することなどをテーマとしてマイクロツーリズムのマーケットをリードしている。個人的には近隣の地域の魅力を改めて再認識することができたことがよかったですと感じています。

##### [事例] 埼玉県秩父

埼玉県の秩父は都心から電車で90分という立地から「ちかいなか」をコンセプトとしてマイクロツーリズムによる顧客を増やそうとしている。ふらっと思いついて温泉へというCMも放送されていたりとアピールを行っている。



引用元: 西武鉄道 Webサイト

### 3 結論

コロナは今までにほどの打撃を観光業界に与えているが、ここで紹介したものも含めてさまざまな分野においてもこの困難を乗り越えるために工夫を凝らしている。

結果としてその新たな取り組みによって新たな風を観光業界に吹き込むこととなっている。特に今回取り上げた首都圏近郊であると密になりがちであるためコロナ対策と言っても難しい部分があるのだが、取り上げた3つの旅行形態においてはすでに多くの人が旅行していることから、コロナとうまく共存しながら観光という娯楽を人々に提供することができていると言えるだろう。

